

## 移行支援コアガイドから ―取り組みのノウハウ―

窪田 満

国立成育医療研究センター総合診療部統括部長

今日に至るまで、成人移行支援に関しては優れた書籍が本邦でも諸外国でもいくつか発表されている。しかし、実際に何から始めれば良いのかわからないのも事実である。そこで、疾患の個別性を超えて成人移行支援にとりかかるためのコアガイドの作成を試みた。もうすぐ、皆様のお手元に届く予定である。

その中で解説していることを少し紹介する。まず、成人移行支援の取り組みのきっかけとして、病院上層部から「小児医療で診療している成人患者を何とかして欲しい」と言われることがある。確かに診療報酬上、小児加算を算定できない患者が、小児入院医療管理料算定病床に入院していることで収益としてはマイナスになる。ただ、その考えのまま成人移行支援に取り組んでも失敗する。一番大切なのは、成人移行支援は小児医療の都合のために存在するのではなく、「その患者さんにとっての最善の医療」を探すために存在しているということである。そういった考え方に変えないと、病院の都合の押しつけになってしまい、患者さん達は「追い出された」という感情を持つことになる。

では、上記を踏まえて、自分のいる病院で移行期の患者さんのための成人移行支援を始めようと思ったとき、まず何をすればいいのだろうか。

始めようと思った最初の一人が小児科医であることもあるし、看護師であることもある。いずれにしても重要なことは、まず「病院として」取り組むことであり、病院長や看護部長などの理解とサポートを得ることが必要である。その上で、仲間を増やしていく。そのためには、成人移行支援が必要な一人の患者さんのためにカンファレンスを開くことをお勧めする。最初は主治医と外来看護師だけで良い。話し合ううちに、何が必要なのかが見えてくる。例えば心理的問題が併存している場合は、児童精神科医が必要になる。例えば移行先の成人医療機関が探せないのであれば、ソーシャルワーカーや地域医療連携室が必要になる。地域で生活していく中での成人診療への移行は、重症であればあるほど、関わる職種が多くなる。そして、そういった多職種のカンファレンスを開催する。この患者さんでうまくいくと、今度は別の患者さんに関してもニーズがでてくる。そうやってカンファレンスメンバーが委員となった委員会を組織し、病院全体の取り組みにしていく。規模は小さくてもいい。同じ目的を持った仲間がいれば、必ず前に進むことができる。